

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会

事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

第45回北海道博物館大会 特別講演要旨

7月6・7日、紋別市で開催された北海道博物館大会では、昨年につづき、“指定管理者制度”について特別講演がおこなわれた。東京大学大学院小林真理助教授（人文社会系研究科文化資源学）にお話いただいた「指定管理者制度の導入をめぐる－公立文化施設のこれまでと今後の課題－」について、要旨を紹介させていただく。

私たちが忘れていけないことに、教育法体系の博物館法が、地方自治法と重なることがある。地方自治法244条は、地方公共団体が「住民の福祉を増進する目的」で公の施設を設けるとし、10条2項は、住民が「地方公共団体の役務の提供を等しく受ける権利を有」すると、サービスを提供する場としての公共の施設を想定している。指定管理者制度の根拠は244条の2にあり、その3項で「公の施設の設置の目的を効果的に達成するため必要があると認めるときは」、管理の委託ができるとする。この「効果的」をどう判断するか、達成するために必要がないなら、制度導入の必要はない。決して民営化を義務づける法律でもない。

選考の状況だが、今まで管理委託を行ってきたところは、既存の財団に指定する傾向があった。東京都のいくつかの区は、公募の方向性を明確に打ち出している。さまざまな人が文化的な施設を3年、5年で指定する危うさを言い続け、民営化を打ち出していた市でも配慮が必要という声が最近聞こえてくる。展覧会やさまざまな文化事業が、1年単位の会計年度で動くことはほとんどない。人的にも継続性を担保する考えから、直営に戻すところが2、3聞こえている。横浜市は、市立の港湾病院も期間30年で日本赤十字社に選定した。文化ホールとか美術館博物館も20年、10年でも良いのではないかな。

政策立案側の問題点を言っておきたい。文化会

館の一般的な目的に、市民の教養の向上と文化の振興及び普及、と書いている。どういう目標を設定し、何を達成すれば良いか、具体的に書いている事例は稀だ。設置目的の前にあるはずの政策目標を、自治体と現場の館とで詰めないといけない。効果的に行うための施策は何か、振興された状態、普及された状態、向上された状態がどういうものか、具体性を持った絵を描く必要がある。郷土博物館のような例は、地元の人たちに地域の歴史を理解してもらい、愛着を持ってもらい、住んでもらうということで、目標がたてやすい。

法改正の趣旨には、「住民のニーズの多様化」、民間ノウハウを活用すること、民間でも十分なサービス提供能力が認められると。本当にそうか、公の施設のサービスで民間もできるかどうかを、自治体が考えなければいけない。経済性とか効率性にいってしまい、数字で表される中で比較してしまう状況がある。民間に行えないもので住民に必要とされるサービスを提供したり、将来行えるかもしれないけど、まだ育てない産業への投資という考え方もある。特に文化施設は、長期的な視野にたった事業展開をする必要があり、やはり民間ではできない。文化施設、文化施策が継続性を担保するときに、指定管理者と政策を外から監視、評価する第三者機関が考えられないと、文化の問題は難しい状況におかれてしまうのではないかな。そのことを自治体レベルだと考えていけるのではないかな。
(文責 事務局 寺林伸明)

事務局からのお知らせ

第45回大会の記録集が完成しています。入手を希望される会員は、事務局（庶務担当：小林幸雄）までご一報ください。連絡先は、電話：011-898-0456、FAX：011-898-2657（いずれも北海道開拓記念館と共通）、あるいはE-mail：kobayashi.yukio@pref.hokkaido.lg.jp です。

平成18年度 ミュージアム・マネージメント研修会の報告

平成18年度の北海道博物館協会ミュージアム・マネージメント研修会が、道東3管内博物館施設等連絡協議会（佐藤達雄会長）主催により、「魅力ある博物館創りを考える」をテーマとして10月26日・27日の両日厚岸町で開催されました。

この研修会は、道東3管内では平成12年に釧路市で開催してから6年ぶりということになりますが、諸般の事情にもかかわらず全道から博物館関係者40名が参加し、初日は講演及び事例発表、2日目は施設見学という日程で行われました。

・基調講演「ふしぎからはじまるく科学>との出会い」旭川市科学館館長 佐々木恵一氏

旭川市科学館「サイバル」を例に、建物自体が醸し出す不思議な空間や低温実験室などの常設展示、プラネタリウムや天文台、イベントや特別展についての紹介後、きめ細かい来館者へのサービスによる多様な関心を持つ人達の学ぶ場と機会を提供することや、展示の評価を踏まえた計画的なリニューアルの必要性、旭山動物園効果により入館者が非常に増えているが、集客力に引きずられて調査研究がなおざりになるなどの課題とともに、子供達の理科ばなれや科学ばなれに対して、科学館の果たす役割の重要性を提言していただきました。

・事例発表1「遊学館とは ～魅力ある展示・教育プログラムを目指して～」釧路市こども遊学館学習担当 高橋香織氏

平成17年7月に開館した科学館と児童館の機能を併せ持つ「釧路市こども遊学館」について、施設や組織形態及び事業展開の紹介とともに、市民がボランティア活動に関わる仕組みと実践について発表され、新たにものを創り出すためには体感して学ぶことが重要であると報告されました。

・事例発表2「あなたにとって博物館とはどのような場所ですか？～山脈館で“魅力”について考える」日高山脈館学芸員 小野昌子氏

日高山脈館において、入館者が展示のテーマと自分を結びつけられる（興味を持つ）場合や、館内説明がある場合は好評が得られているが、興味のない人にどうアピールするかが問題であり、最初に『おっ』と言わせるような工夫をすることが必要である。そのためにはスタッフが生き生き、伸び伸び仕事をする意欲を持つことと、そうできる環境を整えることが重要であり、一般的に言われているこれらのことを粘り強く続けていくことが最も重要であると報告されました。

引き続き行われた討論会では、釧路市立博物館学芸主幹 橋本正雄氏の司会により意見交換がなされ、各館での魅力づくりについての様々な苦労や、個人会員である北海道厚岸水産高校教諭からの教育現場の様子などが紹介されました。また、博物館に人を呼び込む為には現状の分析が大切であるが、呼び込んだ後をどうするかを考えなければならないとか、地元のことを大いに発信することが必要であるなど、活発な議論が繰り広げられました。

研修会終了後、厚岸味覚ターミナル・コンキリエに場所を移して、普段なかなか会えない方々と厚岸を代表するカキや魚介類を堪能しながら、夜の更けるまで情報交換がなされました。

2日目の施設見学は、海事記念館を見学した後、郷土館と国泰寺へ向かい、老桜樹や色古丹松とともに、仏牙舍利塔や本堂内の文化財及び歴代住職の墓などによって、江戸時代の佇まいを体感しました。その後、太田屯田開拓記念館と太田屯田兵屋で開拓の苦勞に思いを馳せたあと、厚岸町教育委員会で保護増殖に取り組んでいるアッケシソウ栽培地を見学しました。

2日間という短い時間での研修会でしたが、討論会でも出ていたように、“博物館の魅力は人である”という言葉の念頭に置きながら、初心に戻って博物館活動に取り組んで行こうと思っと思っています。日々の仕事の中に埋もれて、つつい忘れがちになる「人とのつながり」を考えるいい機会になりました。

(厚岸町海事記念館 学芸員 熊崎農夫博)



会場風景



国泰寺見学風景



H18年度 第2回 研修会 「余市町の博物館施設を訪ねて」

平成18年10月24日（火）、余市町を会場に、石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会の現地研修会を開催しました。研修会は、本協議会が出来て2年目の平成11年から毎年この時季に3管内持ち回りでを行っています。今年は後志の担当で、余市宇宙記念館スペース童夢の佐々木館長・打矢主任、余市水産博物館の乾主幹・浅野学芸員の全面的なご協力で行われました。はじめに佐々木館長から歓迎のご挨拶をいただき、打矢主任のご案内で研修会開始となりました。

宇宙記念館では、毛利衛宇宙飛行士関連資料や各国の宇宙食を見学した後、眼鏡をかけて3D体験、シップのキャプテンを決めるためのクイズに挑戦したりと楽しく見学させて貰いました。ちなみに我々のキャプテン（クイズ正解率の高い方）は、小樽市青少年科学技術館の東山主任でした。一同、さすが〜。お陰で全員無事、地球・余市町に帰還することが出来ました。

水産博物館では、乾主幹のご案内で特別展『海に生きるアイヌ民族』を主に見学しました。特に

日本に2例しかない「カムイギリ（※）」が二つ並ぶのは今回が初めてと、解説に熱が入りました。※余市から石狩湾地方のコタンで豊漁を祈るために祀られたもので、海の神シャチを表現している。

その後、乾、浅野両氏のご案内で旧下ヨイチ運上家、旧福原漁場に移動し、普段は未公開の部分も特別に見せていただきました。日陰に入ると浜風は堪えると言いつつも、和気あいあいと研修は続き、天候にも恵まれ良い時間を共に出来たと思います。時間の許す方は、ニッカウキスキーのウイスキー博物館見学にもご参加いただきました。

任意で行われた懇親会では、さらに和気あいあいと盛り上がり、終電にあわてて飛び乗ったのは言うまでもありません。

（北海道開拓の村 学芸員 黒川郁）



旧福原漁場見学風景



平成18年度 北斗市郷土資料館特別展 「北斗のあけぼの-縄文時代から縄文時代まで-」開催のお知らせ

北斗市は平成18年2月1日、上磯町と大野町の合併により誕生しました。北斗市郷土資料館（旧名大野町郷土資料室）では現在上磯地区と大野地区の歴史を融合した新しい資料館づくりに取り組んでいます。

北斗市では、現在縄文時代を中心とする104の包蔵地が確認されていますが、同郷土資料館の考古資料に関する展示が手薄な状態でした。そこで新市誕生を記念した特別展として、北斗市から出土した考古資料を公開することにしました。

展示の主体となるのは旧上磯地区から出土した遺物で、縄文時代から擦文時代までの土器、石器などです。旧上磯地区では緊急発掘調査がいくつか行なわれており、縄文時代中期から後期の土器を中心とした遺物が出土しています。この中で押上遺跡の発掘調査（旧上磯町教委）から出土した底部に木葉痕が確認される土器、フタと胴部に分かれた土器などを展示します。また茂別遺跡の発掘調査（北海道埋蔵文化財センター）では、縄文時代早期から続縄文時代までの遺構、遺物が確認され、本遺跡より出土の動物意匠土器片、管玉な

どを展示します。矢不來3遺跡（旧上磯町教委）からは、擦文時代の土器、紡錘車を展示します。

本特別展のほか、国指定史跡「松前藩戸切地陣屋跡」から陶磁器類、「矢不來館跡」から青磁碗などを常設展示しています。ご来館をお待ちしております。（北斗市郷土資料館 熊谷 航）

開催期間/平成18年11月4日～平成19年2月4日

開館時間/午前9時～午後4時

休館日/毎月第1月曜日、年末年始

入館料/無料

会場/北斗市郷土資料館 第2展示室

お問い合わせ先

北斗市郷土資料館 (0138) 77-6681



茂別遺跡 動物意匠土器片



市町村合併を迎えて オホーツクミュージアムえさしの取り組み

平成18年3月20日、枝幸町は隣町の歌登町と合併し新たな一步を踏み出した。旧歌登町は昭和14年に当時の枝幸村の内陸地域が分村したもので、実に67年ぶりに一つのまちに戻ったことになる。

この間、枝幸歌登の両町は産業や文化など様々な面で途切れることなく交流が続いてきた。その一方、歌登町には専門職が配置された博物館施設がなかったため、文化財保護の面で必ずしも十分な活動が展開できていたとは言えない。歌登は日本有数のデスマスチルス化石の産地であり、亜炭採掘坑や殖民軌道跡などの近代化遺産にも恵まれている。旧美幸線のトンネルには多様なコウモリが生息し、歌登町の郷土資料館の目と鼻の先には特定外来生物のウチダザリガニが泳ぎ回っている。こうした地域の特色ある「教育資源」を有効に活用しながら、新しい枝幸町の地域学習を進めていくことが、私たち「オホーツクミュージアムえさし」の使命と考えている。

今年度、オホーツクミュージアムえさしでは、枝幸歌登両地区の交流を進め、相互理解を図るために、歌登地区を会場とした様々な普及講座を開

催してきた。コウモリ観察会や化石の体験発掘、巨樹の観察や亜炭の体験採掘など、子供からお年寄りまで多くの町民が事業に参加した。特に亜炭の採掘では地元住民が高校生のボランティアとともに事業の運営をサポートし、子どもたちに地域の産業史を伝える取り組みが実現できた。

枝幸地区に残されたオホーツク文化遺跡やニンシ漁場遺構などの「海」の資源と、歌登の「森」の資源を組み合わせることができれば、多様な博物館活動の展開が可能になると思う。

歌登地区での開催事業にもかかわらず歌登地区住民の参加が少ないことなど、解決すべき課題は多い。しかし、ミュージアムの博物館活動が枝幸歌登両地区の住民の交流をうながし、「絆」を深めることにつながるものと信じている。

(オホーツクミュージアムえさし 学芸員 高島孝宗)



廃校の校庭で亜炭を使って焼き芋を作る参加者



平成18年度日胆地区 博物館等連絡協議会研修会を終えて

日胆地区博物館等連絡協議会では平成18年9月28・29日の日程で研修会を14館園20人が参加し浦河町で開催しました。

まず、白老アイヌ民族博物館館長中村齋氏が日本博物館界最高賞となる「棚橋賞」を受賞されることが報告され、参加者から祝福の拍手が贈られました。

その後、浦河芸術文化事業協会澤谷英勝氏を招き、「町のこし、町おこし」と題する講演を頂きました。澤谷氏は、「町村合併により伝統が消える町名や今素晴らしい伝統が文化が消えていっている」と指摘し、「町おこし」はハード、「町のこし」はソフト、その2つがうまくかみ合っただけで、強い町ができるはずで、「受身にならず自らが積極的に創り上げていく『文化の連動性』が町のこしにつながる」と主張しました。

続いて、テーマを「博物館の持つ学習資源の活かし方」として、えりも町郷土資料館中岡学芸員の司会による研究協議に入りました。最初に、各館園が実施する地域住民サービスや個々の調査研究の事例を発表。この中では、博物館や地域にあ

る特徴的な教育資源を効果的に活用している内容がだされ、「今後は博物館からの発信だけでなく、地域住民から受信もしなければならない」などの意見が出されると共に、地域住民の日常生活の中に溶け込むことの重要性や学校教育との密接な連携の必要性などの問題提起が出されていました。

協議終了後、懸案の『日胆博物館マップ』を来年2月までに完成させることとしました。

また、翌日は好天の中、野外演習としてJRA日本中央競馬会日高育成牧場を訪ね、1キロの直線馬場での調教の様子など広大な各施設やメモリアルホールを見学し、新たな発見がいくつもあった充実した2日間の研修に幕を閉じました。

(浦河町立郷土博物館 副館長 砂子沢登)



参加者一同JRA日高育成牧場展望台にて



コンクリート・レンガ造り 建造物見学会の開催

根室市歴史と自然の資料館では平成18年10月21日(土)に史跡見学会を行った。

今回は市内に残る築50年以上経過するコンクリート、レンガ造りの建造物を探訪する内容である。巡検先は海底ケーブル陸揚庫、落石無線電信局、和田屯田被服庫、大湊海軍通信隊根室分遣所(現、根室市歴史と自然の資料館)、明治公園サイロ(国登録有形文化財)、旧牧の内飛行場、友知トーチカ群である。

海底ケーブル陸揚庫は根室と国後島ケラムイを結んでいた電信ケーブルの陸揚げ倉庫であり、明治33年に建設されたというコンクリート建造物である。

落石無線電信局は明治41年に建築されたが、数度の建替えを経て、現在に至る。昭和6年に根室に飛来したリンドバーク機との交信は有名である。

旧牧の内飛行場は太平洋戦争末期に建設されたもので、強制労働で朝鮮半島から連行された人々が多く犠牲になっている。現在でも滑走路や掩体壕が残る。ここでは当時を知る参加者から、様々な情報を御教示頂いた。

友知トーチカ群では実際に中に入ってトーチカの構造を見学した。根室市内のトーチカは大山史前学研究所を主宰した大山柏の指揮により建設されたもので、市内に15カ所現存する。市内では宅地化していないところが多く、こうした建物も廃墟同然であるが残っている。近年は旅行雑誌に見所の一つとして紹介され、資料館への問い合わせも毎年数件ほどある。

普段は通り過ぎるだけで特に気にも留めない史跡であるが、その担ってきた役割は重要なもので根室の近、現代史を雄弁に語っている。

参加者からは、廃墟同然なので近寄りたがいが見学会としてみんなで回ると、ひとつひとつの史跡をじっくり見ることができ、重みを感じるということでした。

(根室市歴史と自然の資料館 学芸員 猪熊樹人)



友知トーチカ群



網走管内博物館連絡協議会 平成18年度研修報告

網走管内博物館連絡協議会では、総括研修を北見市で、実技等を中心とした個別研修を各館持ち回りで毎年開催している。今年度は総括研修が8月18日北網圏北見文化センターで開催、個別研修が9月8日斜里町立知床博物館で開催された。

北網圏北見文化センターで開催された総括研修は、講演と特別展のギャラリートourを行ない、27名が参加した。講演は「北海道における旧石器時代から縄文時代への移行期について考える」と題して、ところ遺跡の館の山田哲学芸員から、北海道における旧石器時代から縄文時代への移行をテーマに、氷河時代とよばれる更新世から温暖な完新世への気候の変動と関連した、人々の居住生活の変化を、最新の発掘調査等の成果をもとにしたお話を伺った。また、ギャラリートourでは、旧北見市、旧端野町、旧留辺蘂町、旧常呂町の新北見市合併記念として、各地域の学校や公共機関に所蔵してある貴重な絵画や彫刻などを一堂に集めて北網圏北見文化センターで開催されている、特別展「OH! 蔵出し・新北見のお宝展」を鑑賞した。

斜里町立知床博物館で開催された個別研修は、「岩石の身近なミクロな観察方法について」と題して、斜里町立知床博物館総務課長の合地信生学芸員の講師で、講義や実習を6名が参加して行なわれた。内容は岩石の名前や、そのでき方についての基礎的な講義と、顕微鏡による岩石のミクロ的な観察の方法を、高価な研磨機械や偏光顕微鏡を使わず、身近な道具で行なう方法を学んだ。今回は包丁とぎ用機械と研磨材(カーボラダム)を使い、厚さ30ミクロンの岩石剥片を参加者が製作し、肉眼によるマクロな観察と、生物顕微鏡による身近なミクロの観察により、岩石内に含まれる石英や長石を観察するとともに、偏光板を利用し、岩石に含まれる鉱物の色の違いから、鉱物を同定する方法を学んだ。そして最後に知床博物館の講座で行なっている「メノウ磨き」を体験し、研修を終えた。今回の研修は「岩石の標本を作り、博物館において地質の正確な情報が蓄積され、地球科学に対して広く興味をもたれること」が目的であるが、高額な設備・機械を用意しなくても、身近にある機械を組み合わせ安価に設備を用意する方法があり、それにより地方の博物館でも地学情報の集積が図れることを学んだ。

(紋別市立博物館 佐藤和利)



平成18年度学芸職員部会研修会総会 於：北海道大学総合博物館

今年度の道博協学芸職員部会研修会総会は、北海道大学総合博物館において10月12日・13日の2日間にわたって開催された。

北海道大学総合博物館は、以前理学部が入っていた趣のある3階館の建物中に居を構えている。

今回の研修テーマは「地域学のススメー北海道の自然と文化」である。学芸職員には多種多様な専門分野があり、その専門分野の中で最近の話題や研究の傾向について、最先端に関わっている学芸員・研究者から、話題を提供していただき、研鑽しようと企画された。

講演は、北海道大学総合博物館大原昌宏さんによる「ファーブルと昆虫の世界」であった。ファーブル昆虫記の最終巻第10巻が出版され、来年100年になることから、企画展準備の中からのお話であった。

ファーブルは、南フランスの自然史の情報を作り出し発信した。ただ昆虫を観察しているのではなく実験を通して自然を解明していたことが紹介され、郷土学は郷土観をつくることと述べられた。

研究事例報告は「北海道の自然と文化－それぞれの現場から」をテーマに6者から発表があった。

①北海道の自然と文化の根元を支えるヒグマ

のほりべつクマ牧場：前田菜穂子氏

②ニホンテンの分布拡大はあるか－北海道に

おけるクロテン・ニホンテン分布の再検討
森林総研北海道支所：平川浩文氏

③日本のクロテンはなぜ黄色い？

クロテンの毛色変異が意味するもの」
北大・生態遺伝学講座：鈴木仁氏

④ヒゲを発明したクジラ－

北海道は海生哺乳類進化の舞台
足寄動物化石博物館：澤村寛氏

⑤川内家文書にみる漁業活動

余市水産博物館：浅野敏昭氏

⑥長野県茅野地方の寒天製造と

北海道における原藻生産
北海道開拓記念館：會田理人氏

簡単にまとめると、ヒグマは海の栄養を陸域にもたらすサケを有効利用し、他の生き物がサケを利用しやすいように、食べる。サケの栄養が山の樹木の栄養源となり、物質循環の大きな役割がヒグマにはある。北海道にはクロテンがもともと生息していたが、毛皮生産のために飼育された外来種であるニホンテンが分布を広げ、在来種のクロテンを追い出している。ニホンテンの分布は河川

によって制限されているかもしれない。クロテンには毛色変化があり、原因は毛色関連遺伝子の塩基配列が一つ異なることにある。足寄から「歯のあるヒゲクジラ」が出土している。調査捕鯨のミンククジラの胎児を解剖し、化石における推定(クジラヒゲは歯の内側の歯茎の粘膜から出現した)を裏付けることができた。ニシン漁家川内家へは、秋田のごく限られた地域から出稼ぎに来ており、各人の仕事の分担、作業日程などが判明した。北海道で採取される海藻(テングサなど)が、長野県に送られ寒天に製造されており、北海道からの出稼ぎ労働者、原藻の流通がある。

<まとめに誤りがあれば、文責者の責任です。>

研修会終了後、総合博物館の一部を利用していただき、展示を見ながらのアカデミックな交流会が開かれた。藤田正一北大総合博物館館長のご出席をいただき「地域の博物館等との交流を今後も深めていきたい。」とコメントを頂戴しました。

2日目の総会では、道博協の組織財政にかかわるプロジェクトチームでの協議内容が報告され、議論が交わされ「部会自体のあり方、研修の内容についても検討」「指定管理者制度について、道博協でガイドライン的なものを示せないか。」との意見があった。

道博協の組織財政改革に、今年度から学芸職員部会も積極的にに関わり、部会の活性化を図るためにも、学芸職員部会員間の情報交換の場としてメーリングリストを開始することを決めた。その後、北大総合博物館を大原氏の案内で視察し、今回の研修会総会を終えました。

最後に北大総合博物館のスタッフとボランティアの皆さんの献身的なサポートにより本研修会が盛況に終ることができ、感謝の意を表します。

(報告：えりも町郷土資料館 中岡利泰)



総会の様子

学芸職員部会メーリングリスト参加希望者は
erimomus@cocoa.ocn.ne.jp (えりも町郷土資料館) まで申し込んでください。



北海道野生復元プロジェクト ～札幌市円山動物園の取組～

円山動物園では、北海道産の希少野生動物を繁殖させ自然界に戻すプロジェクト、国蝶のオオムラサキ、オニヤンマ、ニホンザリガニ等の小動物を対象とする「オオムラサキプログラム」とオオワシ、シマフクロウ等の猛禽類を対象とする「オオワシプログラム」に着手しました。これらの小動物や猛禽類は、円山周辺にも生息していましたが今は激減したものを、当時と同じような生息環境で息づかせることを目指すものです。

オオムラサキは、かつて動物園に在籍していた職員がオオムラサキの幼虫が食べるエゾエノキを20数年前に植えた木で今年のはじめて個体を確認したことから、園内で保護して繁殖させるものです。オニヤンマやニホンザリガニは園内の円山川に僅かに生息しているものを保護し、増殖し自然界に戻すほか園内でも観察できるように取組むものです。一方の、オオワシやシマフクロウは天然記念物で、絶滅危惧種に指定されております。鷹匠の資格を持つ職員が、飛行・狩猟等訓練を行い、自然界に飛び立たせます。成功すれば、札幌円山生まれのオオワシがオホーツク海をわたりシベリア

と北海道を行き来したり、札幌周辺でもシマフクロウの鳴声が聞かれるようになることでしょう。

かつて、動物園といえば、世界各地の動物や珍しい動物を飼育展示することが中心でしたが、環境の世紀といわれる21世紀は、世界的に動物園自体の果たす役割、使命が変りつつあります。これからの動物園は、地球上の生物の多様性が失われつつある今こそ、より環境面に重点を置いた取組みが求められます。このため円山動物園は新たな試みとして、ロマンあふれる『北海道野生復元プロジェクト』をスタートさせました。

(札幌市円山動物園 園長 金澤信治)



オオムラサキ



オオワシ



ロシアの宇宙船の予備機 『ミール』を展示しています。

苫小牧市科学センターは、青少年の科学する心と郷土文化への興味を育むために昭和45年に苫小牧市青少年センターとして開設しました。昭和60年に郷土資料室が博物館として分離したのを機に苫小牧市科学センターと改称しました。

宇宙ステーション『ミール』をはじめ航空・宇宙を中心に体験を重視した展示をしています。

特に『ミール』は世界で一機しかない本物の宇宙ステーションです。

『ミール』は1986年2月に旧ソ連が打ち上げた世界初の長期滞在型の宇宙ステーションでミール本体に6個のドッキングポートを持つことにより巨大な宇宙構造物を作ることになりました。

しかし設計寿命の5年を遥かに越えた15年の運用で老化し2001年に南太平洋の海域に落下しその使命を終えました。

『ミール』が打ち上げられてから延べ100人以上の宇宙飛行士が滞在し、最終的に地球軌道を86331回周回したことになります。その間行なわれた実験の成果は現在、各国の協力のもと国際宇宙ステーションの建設の中に生かされています。

現在『ミール展示館』に展示している『ミール』は、ロシアに予備機として保管されていた物を日本の企業が買取り苫小牧市に寄贈したものです。

寄贈者から子供たちに「ミール」を直接触れさせて宇宙を身近に感じて頂きたいという好意で展示しています。

また、宇宙開発のあゆみを解りやすく描いた美しいパネルとともに、スペースシャトルの模型を設置し更に2台のコンピュータで宇宙に関する様々な情報を入手したり、電動ジャイロでロケットの姿勢制御の原理が体験できます。

(苫小牧市科学センター 館長 細川正直)



宇宙ステーション『ミール』



「アイヌ文様の美」展

北海道立近代美術館は、12月13日（水）から1月28日（日）まで、「アイヌ文様の美」展を開催する。これは、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構との共催によるものである。

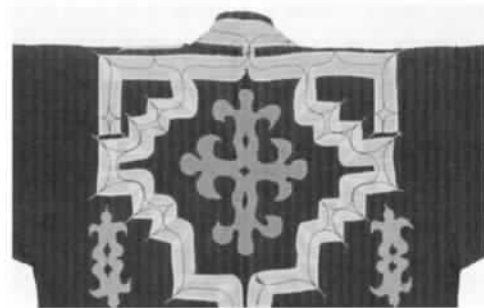
本展は、当館において、初めてアイヌの人びとの工芸品を紹介するとともに、「北海道」の美術史の中に位置づけようとする試みである。とりわけ今回は、衣装や木彫などにみられる文様に焦点をあて、その力強くしなやかな造形の魅力に迫ろうとするものである。

展覧会の構成としては、第一章「アイヌ文様－アイヌモシリに咲いた華」で、遺跡の発掘資料から明治初期まで、制作年代を推定できる資料を通して、アイヌ文様の歴史的流れをたどるとともに、重要なバックグラウンドとして、周辺民族の文様をあわせて紹介する。また、特徴的なアイヌ文様を、出品作の中からピックアップして紹介する。第二章から第四章では、個々の文様から目を転じて、空間全体における構成に注目し、「くりかえす」、「からみあう」、「ひろがる」をキーワードに、アイヌ文様における文様構成の原理をさぐ

る。最終章「ひびきあう－はなやぐ北の春のように」では、異なる色彩や素材を出会わせることによって、文様構成の原理から大きな跳躍を見せ、祝祭的とも呼ぶべき造形が生み出されている作品を紹介する。

本展の準備にあたっては、道内各地の博物館にお邪魔させていただき、まずアイヌの人びとの工芸品を数多く見るということからはじめた。筆者自身、アイヌ民族資料を取り扱うのは初めての体験であり、緊張とともに調査にあたったが、ご担当の方々から、懇切なご教示をいただきながらじっくりと拝見させていただいた。貴重な勉強の機会をご提供いただいた博物館のみなさんに、この場を借りてあらためてお礼申し上げたい。

（北海道立近代美術館 主任学芸員 井内佳津恵）



ルウンベ 木綿衣（部分）市立函館博物館蔵

館園の主な展覧会と普及事業

(2006年12月～2007年3月)

石狩

- 札幌市青少年科学館 (011-892-5001)
1/5～1/14 冬の特別企画「冬休み工作会」
北海道立近代美術館 (011-644-6881)
12/13～1/28 「アイヌ文様の美」
いしかり砂丘の風資料館 (0133-62-3711)
12～3月 テーマ展「2006年のコレクション」
札幌芸術の森 (011-571-0090)
1/20～3/25 「ドラマティック/コレクションドラマを綴るのはあなた」
北海道立文学館 (011-511-7655)
12/9～12/24 企画展「書房の余瀆～中山周三旧蔵資料から～」
2/17～3/18 企画展「人生を奏でる二組のディオ～有島武郎と木田金次郎/里見淳と中戸川吉二展～」

渡島

- 七飯町歴史館 (0138-66-2181)
3/1～3/26 パネル展「タイトルのないはっぴょうかい3」
北海道立函館美術館 (0138-56-6311)
12/17～3/11 開館20周年記念「マジカル・ミュージアム・リターンズ」

後志

- 北一ウエネツア美術館 (0134-33-1717)
11/18～2/23 「ルチオ・ブハッコ展」
2/24～5/31 「ピノ・シニョレット展」
小川原備記念美術館 (0136-21-4141)
12/6～1/15 「マイコレクション展 3」
1/18～2/25 「題名のない展覧会」

空知

- 栗山町開拓記念館 (0123-72-6035)
2/1～3/31 「平成17年度寄贈品紹介」

上川

- 士別市立博物館 (01652-2-3320)
2/24～3/4 テーマ展「ひなまつり」
中原佛二郎記念旭川市彫刻美術館 (0166-52-0033)
11/25～1/14 「まちなみ彫刻写真展2006」
1/20～3/25 収蔵品展「彫刻絵本展」
中川町エコミュージアムセンター (01656-8-5133)
2/22～25 森の学校 07冬
3/29～31 森の学校 Jr 07冬
北海道立旭川美術館 (0166-25-2577)
10/28～3/25 「パリへのあこがれ－渡仏した道北の作家たち」

網走

- 北海道立北方民族博物館 (0152-45-3888)
2/3～3/25 企画展「北の台所事情－食にまつわる道具類」
紋別市立博物館 (01582-3-4236)
2/10～3/11 「村瀬真治の世界展」
3/17～3/31 「博物館サークル活動作品展」
美幌博物館 (0152-72-2160)
12/10～1/28 企画展「寄贈美術資料展」
2/10～3/4 企画展「冬期作品展」

胆振

- 苫小牧市博物館 (0144-35-2550)
2/10～3/18 企画展「静川遺跡国史跡指定20周年記念～環濠遺跡～」

十勝

- 北海道立帯広美術館 (0155-22-6963)
1/25～3/31 「開館15周年記念展」

釧路

- 北海道立釧路芸術館 (0154-23-2381)
11/23～1/28 所蔵品展「コレクション・ギャラリー 前期」
2/3～3/31 所蔵品展「コレクション・ギャラリー 後期」